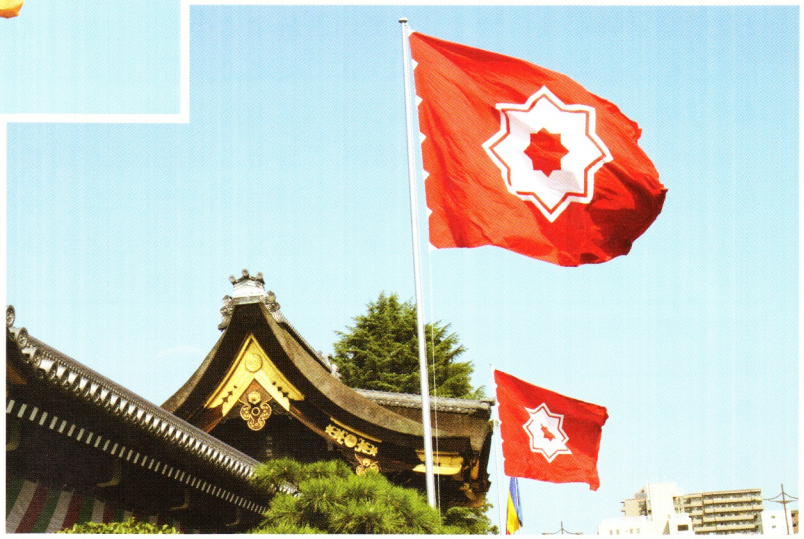
ISSN 2185-2413

仏教儀礼

本願寺仏教音楽・儀礼研究所 ニュースレター

本願寺茶房：亭主 天岸淨圓・客人 梯 實圓和上



2012.1 第14号

はじめまして、儀礼と申します

仏事における心遣い

前号(第13号)で、日本社会には心遣いを形に表したものが多い、というお話をしました。日本文化を理解し継承するには、心遣いや形を察する感性が求められます。では、これらを仏事について考えると、どうなるのでしょうか。

身近な例でいいますと、仏事には粗供養や香典返し、満中院志という慣習があります。これらは、法要のご縁にあって下さったことに対するお礼であり、一般的な返礼とは意味が異なります。そこで今回は、仏事における表現について考えたいと思います。

迷惑をかけたくない…のこころ

近年の仏事は、全体的に簡略化・縮小化の傾向にあると聞きます。例えば、法事やお葬式に親戚を呼ばず、家族だけで行うといった具合です。

その理由は、経済的なものだけでなく、準備を手伝ってくれる人がいないとか、遠方の親戚や高齢の方に足を運んでもらうことに気を遣うから、など人間関係にまつわることが多いようです。また、「子どもに迷惑をかけたくないから…」という意見も聞きます。

確かに、施主としては、簡略化・縮小化の方が楽でしょう。しかし、儀礼継承の観点からすると、どうなのでしょう。

仏事の中心は…

仏事の中心は、誰なのでしょうか。施主でしょうか？お参りに来られる方でしょうか？あるいは、僧侶でしょうか？

その答えは、本堂や仏間を見れば分かります。本堂や仏間では、私たちは如来さまに向かいますね。ということは、仏事の主役は、「如来さま」なのです。このように、仏事に表れる形を理解しなければ、主客が逆転してしまいます。

伝承される教え

ここで再び、「迷惑をかけたくない」という心について、考えてみましょう。これは、自分がとても大変だったという経験に由来しており、同じ思いを子どもにさせたくない、という親心も理解できます。ですが、いま一度、仏事の主役は誰なのか考えてみましょう。そして、ご自身の経験を思い出して頂きたいのです。

その法要は、私が勤めたものなのでしょうか。きっと、仏事を経験する中で、住職さんをはじめ、大勢の方から様々な事を教えられてきたことでしょう。そのように考えますと、私が法要をお勤めさせていただくには、善き導き手が必要だということが分かります。

お作法の素晴らしさ

世にいう伝統世界では、仕来りが重んじられます。仏事も同様に、沢山の仕来りやお作法があります。そして、それらは、単純なものより、少し複雑なものの方が継承されやすいようです。

一見、矛盾しているように感じますが、皆さんも、未知のことや複雑なことに直面した時、一所懸命調べるとか、間違わないよう確認したり、記録したりしませんか。このように、複雑で大変な経験の方が、儀礼を行ったという実感とともに、人の記憶には残りやすいのです。

そのように考えますと、仏事における仕来りやお作法は、み教えを子々孫々まで伝えていくために、形として表れたものと言えましょう。

念仏の声を子や孫に

ぜひ、仏事は簡略化せずに、形通り伝えて頂きたいのです。故人の思い出を語りながら、一緒に準備をしてください。そして、子どもたちの記憶に留めてあげてください。きっと、素晴らしい仏縁となることでしょう。

そして、いつの日か、仏事とは「私が勤める」のではなく、様々な方のお導きによって「お勤めさせていただく」ものであり、またその一番の導き手は、如来様である、と気づかれることでしょう。

（常任研究員　多村至恩）

目　次

◆はじめまして、儀礼と申します　2頁
◆本願寺茶房（第４回）— 念仏者の日にち〈前編〉　3頁
◆儀礼しています（第３回）— み仏さまのお育て　6頁
◆タイムスリップ大遠忌 —— 戦国時代編　8頁
◆行ってきました“親鸞さまの道”　10頁
◆客員・委託研究員の紹介　12頁
◆葬儀“あれこれ”　14頁
◆表紙写真の解説　16頁

対談

本願寺茶房

第4回

本願寺茶房 ── ここは、仏教儀礼に関心を持つ亭主が、各分野より客人を招き、儀礼談義をする処です。今回より、天岸浄圓師を新たな亭主に迎え、本願寺茶房をお届けします。

このたびは、亭主の師匠でもある梯實圓和上（行信教校名誉校長）を、客人にお招きしました。初の師弟対談にいささか緊張気味の亭主ですが、なにやら、仏教伝来当初の習俗や儀礼と、親鸞聖人の習俗観や儀礼観について、話が盛り上がってきたようです。

念仏者の日にち〈前編〉

亭主　天岸浄圓

客人　梯實圓和上

〈日本伝来の仏教〉

梯：仏教が日本に伝えられた当初から、念仏や読経や写経による孝養や追善供養は、仏教の中心的要素として入っていました。例えば658（斉明天皇4）年に造られた、観心寺（河内長野市）旧蔵の観音菩薩像の光背には、七世の父母たちが、死後に良い所へ往くようにと願った文が彫られています。このように、日本の仏教は伝来の当初から、大陸の儒教文化と習合したものであり、亡き父母や先祖を対象とした、追善回向という死者儀礼と切り離すことのできない形で、一般的に受容されていました。

天岸：親鸞聖人は『歎異抄』第五条で、自分自身は父母孝養のための念仏を一度も申したことがない、とおっしゃっています。ここでは、従来の一般的な理解とは、真逆のことをおっしゃっておられますが、一般の意見を切り捨てられたのでしょうか。

梯：切り離したり、切り捨てたりされたわけではないでしょうね。発想の転換をされたのだと思います。親鸞聖人は、当時一般的だった追善供養というような、あやふやな習俗を越えて、大乗仏教の本流に沿って、亡くなった方を確実に救う道を確認されたのではないでしょうか。

追善供養をあやふやなものというのは少々荒っぽい表現ですが、ご存知のように追善回向にはさまざまな条件があります。ただし、その条件をすべて満たした回向であったとしても、相手に届く功徳は、その七分の一だけといわれています。追善の功徳は、願う故人にはなかなか届かないものだったようです。

天岸：それで、平安時代から鎌倉時代にかけては、生前に自分の中陰法要を自分で執り行うという「逆修法要」の風習が栄えたわけですね。

〈確実な廻向の発見〉

梯：まったくその通りで、死んでから他人による善根を当てにするより、よほど確実に、死後良い所へ行くことが約束されるだろうというのです。極めて合理的なようですが、しかし、よく考えてみるとバカバカしい話です。いつの間にかなくなってしまいました。

しかし、仏教の長い歴史の中で唯一、施した功

徳がそのまま相手に届けられる確実な廻向がある、と確認された方がおられます。そのお方こそ、親鸞聖人なのです。詳しくは後で述べますが、その廻向を「阿弥陀如来の本願力廻向」といいます。

梯實圓和上

親鸞聖人以前の日本仏教では、廻向した者に、その善根のほとんどが自身の功徳となって還ってくると信じられていました。しかし、この本願力廻向の場合、その廻向をされる方は、阿弥陀如来さまご自身です。

如来さまの覚りが、自他のへだてを完全に越えた「自他一如の覚り」です。その方による廻向は、自分と他人を峻別して生きているような、凡夫の追善廻向とは根源的にちがうのです。

じゃあ、亡くなった父や母や親しい人たちと、どう交流すればよいのか。それに応えておられるのが、『歎異抄』第五条の法語というわけです。

天岸：それでは、『歎異抄』のお言葉を現代語訳で拝読してみましょう。おそらく解答は、このお言葉の中にあるでしょうから。

── 親鸞は亡き父母の追善供養のために念仏したことは、かつて一度もありません。というのは、命あるものはすべてみな、これまで何度となく生まれ変わり死に変わりしてきた中で、父母であり兄弟・姉妹であったのです。この世の命を終え、浄土に往生してただちに仏となり、どの人もみな救わなければならないのです。念仏が自分の力で努める善でありますなら、その功徳によって亡き父母を救いもしましょうが、念仏はそのようなものではありません。自力にとらわれた心を捨て、速やかに浄土に往生してさとりを開いたなら、迷いの世界にさまざまな生を受け、どのような苦しみの中にあろうとも、自由自在で不可思議なはたらきにより、何よりもまず縁のある人々を救うことができるのです。このように聖人は仰せになりました──

〈一切の有情はみなもって世々生々の父母兄弟なり〉

梯：ここには、いわゆる孝養念仏と呼ばれている、亡き人に対する追善回向を否定する理由が、二つあげられています。

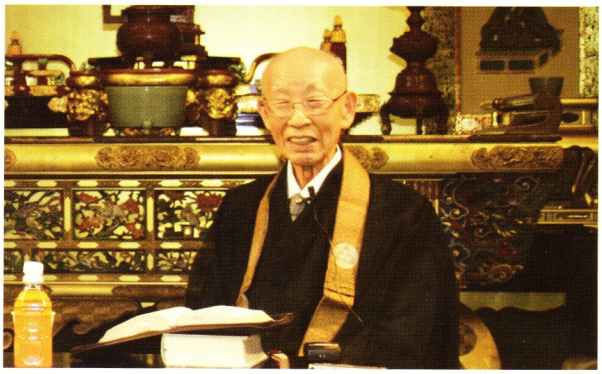
その一つは、一切の有情（生きとし生ける全てのもの）は、いくたびも繰り返してきた限りない「いのち」の流れの中で、互いに、ある時は父となり、母となり、ある時は兄弟、姉妹となりあった、懐かしい親族であると思ってみなさい。すると自分の父母を救うということは、実は、一切の有情の「いのち」を、そして悲しみを引き受けることのできる身にならねばならないことに気づくでしょう。そこからもう一度、浄土に生まれることを願う意味を再確認すべきであるといわれるのです。

そして、もう一つ大切なことは、念仏は、私のものではないということです。阿弥陀如来が、苦悩の有情を救う道として選び定め、私どもの一人ひとりに与えてくださっている、本願の念仏だというのです。

阿弥陀仏は「この願いを受けいれ、これを称えて、浄土へ生まれてきなさい」との願いを込められています。それを受けいれもせずに、念仏をまるで自分が造り上げた善根功徳であるかのように、我がもの顔にして父母に廻向しようとすることは、身の程も知らない無知と傲慢の至りです。そこには、まことの救いのかけらもなく、親も子も、共に迷い続けるだけであるといわれるのです。

では、どうすればいいのか。そこから考え直してみよ、と仰せられているわけです。ここには、現代人の死生観とまったく違った観点から、「いのち」の問題が突きつけられていることを知るべきでしょうな。

天岸：その「一切の有情はみなもって世々生々の父母・兄弟なり」という考え方は、大変興味のある生命観ですね。これについては、後編にて伺いたいと思います。



梯 実圓（かけはし　じつえん）

1927（昭和2）年、兵庫県生まれ。本願寺派勧学。本願寺派布教使。浄土真宗教学研究所元所長。行信教校名誉校長。
浄土真宗本願寺派廣臺寺前住職。
著書『教行信証の宗教構造』（法藏館）、聖典セミナー『教行信証』［教行の巻］［信の巻］（本願寺出版社）、他多数。

亭主のほっと一息

津村別院（大阪）での開催となった対談当日は、台風12号の接近で、近畿各地に大雨洪水・土砂災害警報が出ていました。足下も悪く、危険を伴う夜分に、皆さんにお集まりいただくことに大変気をもみましたが、幸い、たいしたことなく過ぎました。

そんな中にもかかわらず、梯實圓先生には津村別院までおいでいただき、『歎異抄』第五条から、一般的な死者供養と親鸞聖人の供養観のちがいについてお話を聞かせていただきました。「追善回向」と「本願力廻向」。回向という意味では同じことをしながら、主体が異なれば、まったく逆の意味をもつとは、まさに「目から鱗」の状態です。人びとの「死」の間近にいながら、また、親鸞聖人の言葉の間近にいながら、足下の暗さを感じたことです。

とにかく、新米の亭主は緊張の連続で、とても「ほっと一息！」とは、ゆきません。

天岸淨圓（あまぎし　じょうえん）

1949（昭和24）年、大阪府生まれ。龍谷大学文学部真宗学科卒業。本願寺派宗学院卒業。行信教校研究科卒業。本願寺派輔教。本願寺派布教使。行信教校講師。
浄土真宗本願寺派西光寺住職。
著書『浄土真宗の生き方』（探究社）、『蓮如上人のキーワード』（本願寺出版社）、他多数。

2011年度 研究スタッフ

所　長　小野　功龍（雅楽研究）
〔儀礼部門〕
常任研究員　多村　至恩（宗教社会学）
研究員　大田壮一郎（歴史学）
客員研究員　天岸　淨圓（真宗学）
委託研究員　蒲池　勢至（民俗学）
委託研究員　轡田　智文（勤式）
武山　晃隆（真宗学）
山田　雅教（歴史学）
（各五十音順）

事例紹介

儀礼しています

第3回

研究所では、僧侶やお寺の機能を活かした実践的な儀礼活動を、調査しています。具体的な活動の紹介を通じ、様々な儀礼のあり方にふれていただきましょう。

あおば幼稚園の真宗保育

み仏さまのお育て

あおば幼稚園（北豊教区小倉組）

北九州市の閑静な住宅街に位置する「あおば幼稚園」は、1953（昭和28）年に、宗教法人安楽寺附属の個人立幼稚園として開園以来、あおば乳児保育園と共に、一貫した真宗保育を行っています。今回は、人が儀礼によってどのように変化していくのか、真宗保育によって成長していく子どもたちの様子からご紹介しましょう。

お仏参

あおば幼稚園では、毎週月曜日に全園児が参加する、お仏参が勤まります。まず、遊戯室にあるお仏壇に、子どもたちが献灯・献華した後、仏教讃歌を歌います。そして、園長（安楽寺 仁保一正住職）のご法話へと続きます。調査は5月の連休明けに行い、入園して1ヶ月に満たない子どもたちが沢山いたにもかかわらず、とても静かでした。

お仏参は、園長のご法話を含め、約20分間。その間、子どもたちはみな、両手をそろえて正座をしています。園長のお話がよほど楽しいのでしょうか、皆、集中して聞き入っていたことが、とても印象的でした。

お仏参の様子

月曜法話の始まり

ご法話は前園長の時代から始まり、実に60年以上続けられています。現在の仁保園長によるご法話は、別名「月曜法話」と呼ばれ、保護者にも大変人気があるらしく、調査当日も多くの保護者が聴聞していました。

仁保一正園長

実はこの園長、大学卒業後にアメリカに渡り、開教使として活躍した経験があるのです。帰国後、あおば幼稚園の園長となり、真宗保育のモデルとして、アメリカ時代に行っていたサンデー・サービスを導入されました。サンデー・サービスとは、毎週日曜日に行う礼拝と布教であり、日系Ⅱ世の方たちと共に取り組んでおられたそうです。開放的な雰囲気を持つ、アメリカの寺院時代に培った経験は、その後、日本で月曜法話や英語あそびなどに姿を変え、現在も真宗保育の中核を担っています。

み仏さまと共に

真宗保育の子どもたちへの影響は、園児たちの会話からうかがうことが出来ます。例えば、新入園児がバスの中で泣き叫んでいると、ある園児が「先生、僕がなぐさめてあげる。うれしい時も、かなしい時も、み仏さまといっしょヨ！」と、一所懸命あやすといった具合です。

子どもたちの日常会話に、「み仏さま」は頻繁に登場するらしく、彼らの心に、み仏さまが息づいていることが分かります。このように、園児たちは互いに支え合い、イジメや不登校になる子どもが少ないとのことでした。み教えに育まれた幼稚園生活は、

スクールバス

子どもたちにとって一生の宝となるでしょう。

聞く力

あおば幼稚園の卒園生が進学する、小学校の校長先生のお話を紹介しましょう。卒園生は、主に３つの小学校に進学しますが、その全ての校長先生が、「あおばの生徒は、見ただけで分かる」と褒(ほ)めるそうです。その理由の一つは、挨拶ができることにあります。これは、多くの幼稚園で実践されていることでしょう。

次に、姿勢正しく聞き続けることができることです。１年生の中には、座り続けることに慣れない子どももいるでしょう。しかし、お仏参を経験するあおばの子どもたちは、集中して話を聞く力を備えているというのです。これこそ、儀礼を実践してきた賜物(たまもの)といえましょう。

園長のご法話を聞く子どもたち

教えはつづく

身に備わった教え（儀礼）は、卒園後も失われることはありません。ある保護者のお話です。小学校に入ったお嬢さんが、ある日、とても深刻な顔をして「お母さん、み仏(ほとけ)さまは、いつでも見ているよね…」と言われました。お母さんは、何のことやら分からず、しかし、いつも園長先生がお話し下さるように「そうよ、み仏さまはいつも一緒だよ」と答えられました。すると、お嬢さんの顔がみるみるうちに晴れわたったというのです。

お母さんによれば、きっと学校で何かあったと思うが、幼稚園での教えを忘れることなく、子どもは子どもなりに一所懸命考え、解決しようとしていたのだろう、ということでした。そして、その姿にとても感動した、ともお話し下さいました。

子どもに導かれて

現代の都市部では、お仏壇のない家庭が少なくありません。次は、そのような園児の家庭における、印象的なお話を紹介しましょう。

あるお母さんは、自身もまた、お仏壇のない家庭で育ったせいか、手を合せる習慣がなかったそうです。子どもをあおば幼稚園に通わせるようになってから、ご主人の実家に帰省した際、お仏壇に手を合せる子どもの姿を目の当たりにして、とても恥ずかしくなったというのです。

また、あるお母さんは、人生初のお葬式に参列した時、どのようにお参りして良いか分からず困っていた所、念珠(ねんじゅ)の持ち方から焼香(しょうこう)の仕方など、横から子どもが色々と教えてくれ、彼の真似をして乗り切ったと、お話し下さいました。

このように、真宗保育が子どもたちを通じて、家庭にまで広がっていることが分かります。しかも、子どもを通じて触れるみ教えに、大人が素直に従っていることも、大きな特徴と言えましょう。儀礼とは、実践や経験によって得られるものです。ですので、そこに理屈は介在しません。特に、子どもたちのように、自然と身についた儀礼には、周囲の者も素直に従えるのでしょうね。

花まつりの様子

生活発表会より

ワンポイント儀礼

調査当日は、ちょうど「花まつり」が行われていました（あおば幼稚園では５月に行う）。また、あおば幼稚園では法要だけでなく、仏教劇も行われています。子どもの劇と、あなどることなかれ。これも立派な儀礼なのです。儀礼の発展には、大きく分けて二つの方向性があります。一つは、儀式です。これは、お仏参や法要に代表されるものですね。他方は、芸能です。民俗芸能と呼ばれるものの多くは、宗教儀礼を起源とするものです。あおば幼稚園の真宗保育では、この両方を体験することができるのです。しかも、お仏参のように繰り返し実践される儀礼や、劇のように楽しみながら身に備わる儀礼は、生涯忘れられることなく、子どもたちの心に、“み仏さま”が生き続けるのです。

（常任研究員　多村至恩）

特集 タイムスリップ大遠忌

戦国時代編

大遠忌法要は、長い歴史と伝統に支えられてきました。前号(13号)の江戸時代編に引き続き、今回は戦国時代の大遠忌法要を取り上げ、その意義について考えてみましょう。

大遠忌と教団形成

300回忌と大坂*1

報恩講は覚如上人の時代からお勤めされていますが、50年に一度の「遠忌」として盛大に勤まるようになったのは、親鸞聖人300回忌法要（1561［永禄4］年）が最初と考えられます。この時、本願寺は大坂（現：大阪）にありました。戦国時代、各地の主要な真宗寺院では、境内と周辺住居を防衛するため濠や塀で囲む寺内町が形成されました。なかでも大坂本願寺*2は、五町四方の規模を誇り、世俗権力の税が免除される半ば独立的な宗教都市として栄えていました。大坂本願寺は、現在の大阪城公園二の丸付近にあったと推定されます。現在の大都市大阪は、この寺内町の発展が基礎となっているのです。

300回忌と儀礼

大坂の地で勤まった宗祖300回忌は、その儀礼形態も従来と異なる画期的なものでした。たとえば、装束には法服・衲袈裟（七条袈裟）が用いられ、法要次第は日中に読経・行道、式文拝読は逮夜とされました（『私心記』）。その理由は、「他宗ノ衆参詣モアルヘシ」という事情から、「聖道門」（天台宗や真言宗）にならって威儀を整えた、ということのようです（『今古独語』）。ここより、この法要が教団内に止まらず、社会的儀礼としての意義も持っていたことがうかがえます。

300回忌と教団

宗祖300回忌が勤まった永禄年間は、戦国時代の後半に当たる激動の時期であり、本願寺教団にとっても変革期でした。1559（永禄2）年、本願寺は朝廷から門跡寺院として認められ、院家・坊官の制*3など、他宗派と共通した教団体制を構築してゆきます。その評価は色々とありましょうが、当時の社会と教団の関係という意味では、宗祖300回忌のあり方も、他宗と同じ方向性（教団の社会的志向）として理解することができます。

この宗祖300回忌を境に、真宗各派をはじめ、他宗派にも遠忌法要が広まりました。これ以前にも他宗派で遠忌法要が行われた例はありますが、教団全体で祖師遠忌を勤める江戸時代以降のスタイルは、やはり宗祖300回忌からはじまったと考えられます。それだけ、この時の法要が盛大であり、また当時の本願寺教団が社会的に注目されていたことがわかります。それゆえ、その後、武力による天下統一を目指す織田信長との衝突（「石山合戦」）を余儀なくされたともいえましょう。

宗祖300回忌前後の状況

年号	事項
1533（天文2）年	宗祖影像を大坂御坊に移す（後の大坂本願寺）
1554（天文23）年	顕如宗主継職
1559（永禄2）年	門跡成（門跡号の勅許）
1561（永禄4）年	宗祖300回忌を修す
1570（元亀1）年	石山合戦はじまる

大阪城公園内にある大坂本願寺推定地の石碑

＊1　大阪は、明治初めまで「大坂」と表記していました。
＊2　かつて「石山本願寺」と呼ばれましたが、「大坂本願寺」を正しい名称とする学術研究上の見解に従っています。
＊3　院家・坊官は門跡寺院の内部組織。院家は僧侶、坊官は俗人。

謎の333回忌

333回忌の勤修

数百年におよぶ大遠忌法要の歴史の中で、異彩を放っているのが、1594（文禄3）年の宗祖333回忌です。33回忌ならば現在もそして一般にも行われますが、333回という年回はなじみがありません。また、本願寺で444回忌や555回忌がとくに大遠忌としてお勤めされたという記録もありませんので、やはりこの時に限った勤修と考えられます。ただし、1544（天文13）年、法然聖人333回忌（浄土宗）に本願寺が奉加銭を納めたという記録があるので（『天文日記』）、まったくの異例ではなかったようです。

333回忌の様子

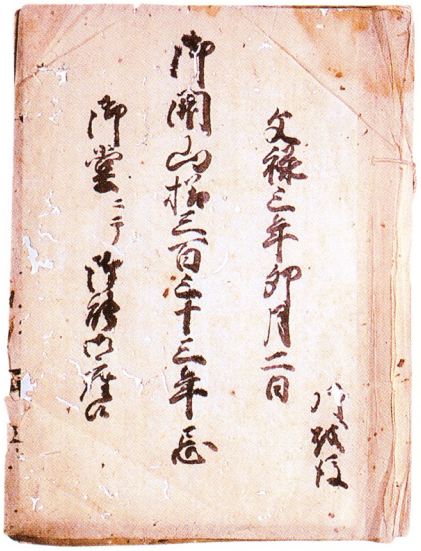
333回忌の様子をうかがえる史料はごくわずかです。『文禄三年三月報恩講次第』（龍谷大学図書館蔵）という記録によると、法要の荘厳に用いられた水引に関する部分に「三百御年忌ノ水引也」とあり、宗祖300回忌と同じ物が用いられていることがわかります。また、本山には『御開山様三百三十三年忌』（本願寺史料研究所蔵）と題する記録も残されています。これは、祝能に振る舞われた献立の食材代金を書き上げた帳簿です。さらに、3月19日より10日間という法要期間は、明らかに300回忌の例を踏襲したものです（ただし、同年秋期にも法要勤修の可能性あり）。以上から、やはり333回忌は大遠忌としてお勤めされたと考えられます。

333回忌の意義

では、なぜ333回忌に限り、50年に1度という大遠忌法要の周期を外れたのでしょうか。明確な回答はありませんが、やはり当時の本願寺教団をめぐる社会情勢も無関係ではないようです。

1590（天正18）年、大坂天満にあった本願寺は、天下統一を果たした豊臣秀吉から京都への移転を申し付けられました。その翌々年の1592（文禄元）年、顕如宗主が没すると長男の教如上人が宗主を継職します。ところが、1年と経たずに、秀吉は教如上人の隠居と、教如上人の弟准如上人への継職を命じました。しかし、教如上人は依然として活動を続け、やがて東西分派へと至ったことはよく知られています。

333回忌がお勤めされた1594（文禄3）年は、准如宗主継職の翌年に当たります。こうした状況をふまえると、333回忌という異例の大遠忌勤修は、教団内が混乱の様相を呈するなか、親鸞聖人のもと皆で一つになろう、という「思い」のあらわれとみるべきではないでしょうか。



『御開山様三百三十三年忌』表紙
本願寺史料研究所蔵

文禄三年卯月二日　門越後
御開山様三百三十三年忌
御堂ニテ御能御座候

写真部分の翻刻

時代と大遠忌

大遠忌法要の「始まり」となった戦国時代の300回忌も、豊臣秀吉の天下だった333回忌も、大遠忌はその時代性を色濃く反映していました。

では、このたびの750回大遠忌法要は、一体どのような「時代」を映したのでしょうか。

（研究員　大田壮一郎）

参考文献・資料

・安藤弥「親鸞三百回忌の歴史的意義」（『真宗教学研究』27、2006年）
・本願寺史料研究所『本願寺史料研究所開設50周年展』図録（2006年）
・『増補改訂本願寺史』第1巻（2010年）
・龍谷大学電子図書館貴重書データベース（http://www.afc.ryukoku.ac.jp/kicho/top.html）

行ってきました“親鸞さまの道”

2011（平成23）年4月25日、当研究所主催「一緒に歩こう“親鸞さまの道”」ツアー（第3回）を実施しました。今回の「堂僧時代の親鸞聖人編」では、比叡山延暦寺の山内を巡拝し、きらら坂を徒歩で下山しました。途中、豪雨に見舞われるアクシデントもありましたが、無事に下山することができました。

今回のコース

①本願寺 → ②にない堂 → ③大講堂 → ④横川 → ⑤きらら坂 → ⑥本願寺

缶バッチ

ツアーの様子

行　程

▶ 08:40
集合・出発式

▶ 09:00
聞法会館出発

聞法会館に集合し出発式です。音楽礼拝をお勤めした後、佐々木恵精教学伝道研究センター所長の挨拶がありました。参加者の皆さんには、資料と参加記念の缶バッチが配られました。

今回も定員を上回る多数の方にご応募いただきました。スタッフ含め総勢50名でバスに乗り、親鸞聖人が堂僧時代を過ごされた、比叡山延暦寺へ向かいます。

▶ 10:10
西塔地区
にない堂

最初に訪れたのは、西塔地区にある常行堂（通称「にない堂」）です。ここでは現在も常行三昧（90日間、念仏を唱えながら堂内を歩き続ける行）が行われています。若き日の親鸞聖人も、この厳しい行に打ち込まれていたことでしょう。今回は、特別公開中の堂内に入ることができました。暗く狭い堂内の中央に本尊（阿弥陀如来）が安置され、柱と柱の間には、行者がつかまるための竹棒が横に渡してありました。参加者の皆さんは、堂内の過酷な環境に驚きながら、聖人のご苦労に思いを馳せていました。

次に、徒歩で東塔地区の大講堂へ向かいました。

▶ 11:10
東塔地区
大講堂(お勤め)

▶ 12:00
昼食
(延暦寺会館)

▶ 13:40
横川地区
恵心堂ほか

▶ 14:50
下山開始
(一部参加者は
岡崎別院・
金戒光明寺へ)

▶ 16:30
きらら坂下到着

▶ 18:00
聞法会館着

大講堂には、無動寺谷大乗院の親鸞聖人“そば喰い木像”が、御遷座されています(2011年11月まで)。正信偈をお勤めした後、武山晃隆布教使よりご法話を頂きました。

昼食後、いよいよ下山となった頃、突然の豪雨に。ひとまず横川地区へ移動し、恵心堂や元三大師堂などを拝観しているうちに雨は上がり、爽やかな晴天となりました。

全員での徒歩下山を目指しましたが、降雨による道中の事故が懸念されたことから、希望者に限り、きらら坂を下りました。その他の方々は、バスで岡崎別院と金戒光明寺へ向かいました。幸い、予想より降雨の影響は少なく、皆さん元気にきらら坂を歩き通し、全員無事に本山へ到着し解散となりました。

なお、ツアー実施にあたり、延暦寺参拝部の皆様にご協力をいただきました。

参加者の声 ― 当日のアンケートから ―

- お念仏を称えながらきらら坂を下りることができ、長年の夢が叶った。(60代・女性ほか)
- 同じ思いを持った人達で集まったので、和やかな雰囲気で良かった。(60代・女性)
- 歩くことでみ教えを伝えられたご苦労を少しでも体感できたように思う。(60代・男性)
- 常行三昧堂に入れるとは思わず、たいへん感動し、涙がこぼれた。(60代・女性)
- 思いがけず岡崎別院を訪れることになったが、これも良かった。(60代・女性)

ツアーを終えて

午前中の延暦寺巡拝は順調でしたが、メインのきらら坂下山を目前に突然の嵐。山の天気の怖さを痛感し、厳しい環境のなかで20年余りを過ごされた聖人のご生涯に思いを馳せました。また、予定時間を大幅に超過し、遠方よりご参加の方にはご迷惑をお掛けしました。このたびの反省を今後に活かしたいと思います。

(研究員 大田壮一郎)

客員・委託研究員の紹介

儀礼部門では、理論と現場の比較など、実践的な儀礼研究を行っています。新たに僧侶育成・布教・フィールドワークなど、現場経験豊富な研究員を迎えましたので、ご紹介いたします。

［新任］

天岸 淨圓
客員研究員

略歴 龍谷大学文学部真宗学科卒業。本願寺派布教使・輔教。西光寺住職。著書『浄土真宗の生き方』（探求社）ほか多数。

コメント 今年度から、教学伝道研究センター本願寺仏教音楽・儀礼研究所の客員研究員としてお世話になります。現在、大阪教区内の寺院住職として、行信教校の講師、本願寺派布教使…と、さまざまなご縁に恵まれていますが、自分ではいずれも中途半端な感じがしています。研究員としてどれほどの貢献ができるか不安ですが、多くの方々と接して得た広がりを手がかりにしつつ、今後の真宗儀礼のあり方を求めてゆきたいと思っています。皆さまのご指導をよろしくお願いします。

蒲池 勢至
委託研究員

略歴 同志社大学文学部文化史学科卒業。同朋大学仏教文化研究所客員研究員。真宗大谷派長善寺住職。著書『真宗と民俗信仰』（吉川弘文館）ほか多数。

コメント 専門は日本民俗学ですが、「真宗と民俗」を主テーマに研究しています。全国各地の真宗門徒が伝承してきた報恩講や蓮如忌、講行事、年中行事、寺檀関係などの民俗を調査してきました。葬送儀礼と墓制にも長年関心を持ち続けています。

伝統的な生活共同体や人間関係の崩壊、生活様式と価値観の変化という現代社会の中で、これから葬儀や墓はどうなっていくのか。これまでの研究をもとに、また一人の真宗僧侶として、進むべき方向性を探って提言したいと思います。

［再任］

轡田 智文
委託研究員

略歴 龍谷大学文学部真宗学科卒業。勤式研究生課程修了後、式務部承仕室・知堂室、勤式指導所を経て、習礼教修所へ異動。2005（平成17）年3月離職。

コメント 式務部では約10年、法要儀式など両堂にご奉仕。勤式指導所でも約10年、練習生や研究生のお世話をさせて頂きました。得度習礼・教師教修所では、約1年半職務に従事させて頂きました。このように、専ら勤式作法や育成指導の現場を経験してきました。

武山 晃隆
委託研究員

略歴 龍谷大学大学院文学研究科博士課程依願退学。専正寺住職。本願寺派布教使・輔教。

コメント ご法座に出講するたび、お念仏のみ教えが、習わしを通して、その地域に染み付いていると気づきます。何気ないことの中に、すごいヒントがあるのかも？深い意味が、ご本願と直結していることを、一緒に聞いていきましょう。

山田 雅教
委託研究員

略歴 早稲田大学大学院文学研究科修士課程修了。西勝寺住職。共著に、本願寺史料研究所編『増補改訂本願寺史』第1巻（本願寺出版社）など。

コメント とかく否定的なニュアンスで使われがちな「儀礼」ですが、日々ご門徒と接する中において、「儀礼」の果たす役割はかなり大きいと実感しています。机上の儀礼論ではなく、現場を預かる身として、現実社会に根差した議論を展開させたいと思っています。

（各五十音順）

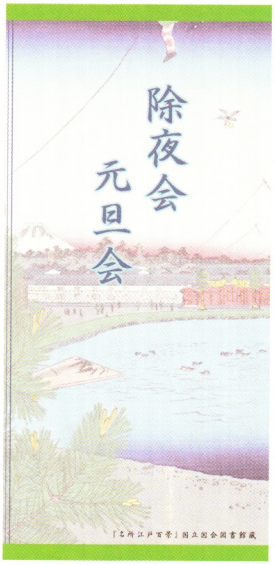
研究活動の紹介Ⅰ ―― リーフレット　年中行事

年中行事に関するリーフレットをお届けしています。当研究所ＨＰ（http://crs.hongwanji.or.jp/ongi/）からＰＤＦファイルをダウンロード可能です。Ａ４・両面カラー印刷をおすすめします。本願寺に参拝される方など、ぜひダウンロードしてお配りください。詳細は、当研究所ＨＰまたは教学伝道研究センター事務局まで（奥付参照）。

歴史と功徳について

歴史とお墓まいりについて

歴史と新年の迎え方



研究活動の紹介Ⅱ ―― リーフレット　シリーズ大遠忌

この度の750回大遠忌法要にあたり、「シリーズ大遠忌」として、大遠忌にまつわるリーフレットを４点お届けしています。リーフレット年中行事と同じく当研究所ＨＰからＰＤＦファイルをダウンロード可能です。ぜひダウンロードしてお配りください。内容は下記の通りです。

Ⅰ：『装束』　／　Ⅱ：『荘厳』／　Ⅲ：『本山参り』　／　Ⅳ：『声明』

『装束』表紙

『装束』本文

僧侶の装束

縁儀の光景から

荘重な雅楽の調べに乗って、阿弥陀堂から御影堂へと続く「縁儀」※の列。それぞれの役割に応じた、色どりどりの装束を身にまとった僧侶たちが、歩みを進めます。

僧侶は、きらびやかな七条袈裟や五条袈裟をまとっています。これらの袈裟は、小さい布を縫い合わせてできています。それは、昔、インドでは、僧侶は捨て布を拾い集め、縫い合わせて一枚の布を作り、それを着ていたことに由来しています。

※導師以下の諸僧が、行列をして堂内を通って入堂する作法

さあ、いよいよ僧侶が内陣に入り、法要が始まります。

内陣は、ご本尊を中心とした宗教的な"聖なる空間"です。威儀を正した装束を身にまとった内陣の僧侶たちは、お勤めの内容によって、ある時はお釈迦さまの説法の再現者となり、またある時は浄土の菩薩がたを演じる役割もします。

「まるで極楽浄土を見ているみたい！」

さもありなん。私たちは、御堂で行われる荘厳で厳粛な儀礼に参加しているうちに、阿弥陀さまの宗教世界へと向かう意識改革が自然に湧き起こされているのです。

あっ、教華がはじまりましたよ。お浄土の蓮の花びらが舞い散っているのですね。

縁儀（『蓮如上人五百回遠忌法要写真大鑑』より）

門徒式章と念珠

肩衣から式章へ

結婚式に出席する時など、よそ行きの服に袖を通すと、自然と身が引き締まり、相手への敬いの心が起こります。では、皆さんは、お寺へお参りする時、どんな服装でお参りされますか？

浅原才市像（安楽寺蔵）

その昔、仏前に座る際には、着物の上から肩衣を身につけていました。当時、肩衣の着用は、最高の敬意を表す正装だったのです。あの有名な、鬼の角がはえている浅原才市さんの肖像画も、ちゃんと肩衣を着た合掌の姿です。

昭和７（1932）年に、その肩衣を簡略化した「式章」が制定されました。それ以降、真宗門徒にとって、式章は仏事の際の正装とされるようになりました。

特集

葬儀“あれこれ”

葬儀は誰のために、そして何のためにするのか

人類史上、もっとも古い儀礼といわれる葬儀。その長い過程で、次第に儀礼に込められた意味は忘れられ、単なる習慣として行われていることも少なくありません。また反対に、宗教的理由のないものが習慣として横行する昨今。今いちど、葬儀について考えてみませんか。

“不条理な死”に見る宗教的情緒

昨年（2011年）の3月に起こった東日本大震災では、葬儀の根幹が改めて問われたような気がします。被害が地震だけでなく、津波を伴って広範囲に及んだことから、我々の想像を絶する状況が起こりました。また、その現実は、被災者でもある生き残った遺族に、悲しい現実を突きつけるものでありました。

メディア報道によると、増え続ける遺体と燃料不足から、一部の自治体では火葬能力が追い付かず、土葬が行われました。これは、遺体の腐敗等による、伝染病を防ぐための特別措置として行なわれたものです。しかし、火葬率97％と言われる現代日本で、土葬が行われたことに衝撃を覚えられた方も少なくないでしょう。ですが、最も衝撃を受けたのは、土葬せざるを得なかった遺族の方々だと思います。

仮埋葬（土葬）では、故人の名前や写真、供養の象徴である読経や花もなく、儀式らしいものは、遺族によって棺に砂がかけられたことだけでした。「葬式も出してやれなかった…」、「火葬すらできなくて…」と、悲しむ遺族の姿に胸が痛みます。儀礼を一切執行できない状況が、「死」とはまた別の悲しみを与えているのです。

当初、自治体の多くは仮埋葬期間を2年としていましたが、遺族からの強い要望によって、順次改葬が行われています。「死者をそのまま放置しておけない」、あるいは「行政に任せておけない」という遺族感情こそ、儀礼の動機となる宗教的情緒といえましょう。この意味において、葬送儀礼を行わないことは、“弔う”という根源的な宗教的情緒が発露できない、ということになるのです。

悲しみを乗り越える儀礼

「葬儀は誰のために、何のためにするのか」その答えには、二つの方向性が考えられます。一つは、死者に対するものです。葬送儀礼がもたらす死者への作用は、いわゆる供養などとして、各宗派宗教によって意義付けられてきました。もう一つは、遺族に対するものです。生きては二度と会えないという、絶対的別離を経験することによって、人は死を受容し、故人が存在しない“新たな生活”を歩んでいきます。この意味において、葬送儀礼には、再出発を可能とする力が秘められていることが分かります。

一般に、人生の節目となる儀式を通過儀礼と言い、葬送儀礼は通過儀礼の一種となります。確かに、人生の終焉にのぞむ葬送儀礼は、私の命の節目でありますが、遺族の人生にとっても大きな節目となることから、葬送儀礼は誰にとっても大変重要な経験となるのです。

葬送儀礼を経験しないことの危険性

近年、葬送儀礼の意義を、遺族の視点による「グリーフケア」として説明することが多くなっています。ここでも、遺族の悲しみを癒し、新生活への移行をスムーズにする“死の受容”が、重要なポイントとなっています。

では、死を受容できない場合はどうなるのでしょうか。グリーフには、ショック期、喪失期、閉じこもり期、癒し・再生期、の4段階があるとされています。特に、“不条理な死”（震災や事故など）では、ショックが大きすぎ、喪失期と閉じこもり期が重なり、回復に時間がかかると言われています。また、時にはＰＴＳＤ（心的外傷後ストレス障害）として、身体的・精神的な不調を招く危険性もあるのです。

死の受容には、厳しい現実との直面が避けられません。「目を背けたい…、なかったことにしたい…」という気持ちを、そのまま放置することは、かえって私の命を危険にさらすことになると、私たちは知るべきでしょう。

葬儀参列者は、サポーターである

そのような事態を避けるべく、人類の英知として発展したのが葬送儀礼でしょう。葬送儀礼は、死という現実を否応（いやおう）なく突き付けます。一人では耐えがたい死や悲しみを、親族や知人と共有することで、死の受容をスムーズにさせてきました。

また、中陰（ちゅういん）を始めとする仏事は、悲しみを共有した人々との再会の場でもあります。僧侶を含め、葬送の場に立ち会ったものは、遺族の新しい生活への旅立ちを支える、サポーターとなるのです。

葬儀を行わなければ、僧侶というサポーターは存在しません。また、親族のみの葬儀であれば、自身が話さない限り、友人・知人というサポーターは得られません。死の受容は、経験しなければ分からないことです。だからこそ、葬送儀礼を行う必要があるのです。

葬送儀礼は絆を深める

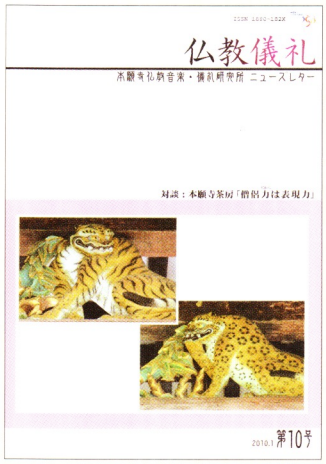
葬送儀礼には多くの習慣があり、一見すると面倒で時代錯誤（さくご）的な存在かもしれません。しかし、全ての儀礼には、人と人の絆を深める、密着度を高めるという、良い拘束力が働いています。皆さんも子どもの頃、葬儀や法事で大勢の親戚が集まると、お祭りのように嬉しく感じた経験があるでしょう。大人になれば、シガラミという負の拘束力に意識が向かいがちですが、仏事では、儀礼が持つ正の拘束力を最大限に発揮したいものです。

そして、「私」が亡くなった時、私のお葬式を出す家族が安心できるように、普段からお寺さんとの関係を深めておくのも、先逝（さきゆ）く者の努めではないでしょうか。また、もし、自分が愛おしい家族を送る立場となったならば、遺（のこ）った「私」の都合ではなく、故人のご縁を大切にし、その方々と共に最後の儀式をお勤めすることも、大切な「お弔（とむら）い」になるのではないでしょうか。

＊本文は、『宗報』2011年８月号に掲載された記事を、加筆修正したものです。　（常任研究員　多村至恩）

バックナンバーの紹介――本願寺仏教音楽・儀礼研究所 ニューズレター 仏教儀礼

第10号

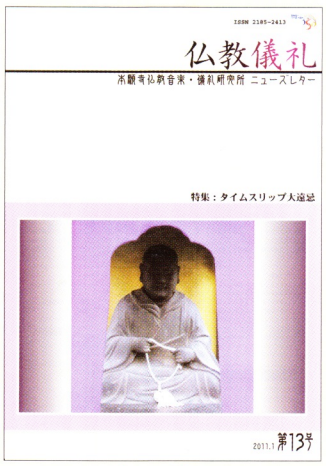


残部なし

第11号

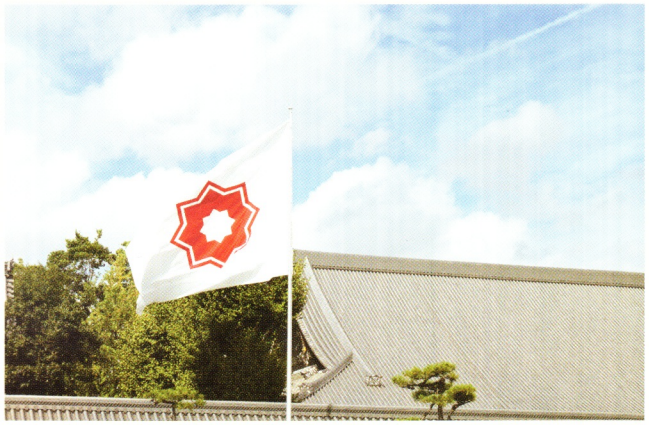
残部あり

第13号



残部僅少

表紙写真の解説――本山旗・仏旗



本山旗の由来

本願寺の法要にお参りするとき、堀川通りに面して並ぶ、ひときわ大きな本山旗・仏旗が目に入ります。本山旗は、1911（明治44）年の650回大遠忌法要に掲揚が確認できます。また、旗にあしらわれている図柄の由来は、江戸時代にさかのぼります。

江戸時代の本願寺では、幟（のぼり）や提灯（ちょうちん）に「山路雁木（やまじがんぎ）」という紋様を使っていました。「山路」とは「山形」と同じ意味で、「雁木」とは、群れて飛ぶ雁（かり）の列のようにジグザグの形をあらわす言葉です。つまり、山路雁木とは、山形のジグザグ模様のデザインという意味です。報恩講など各種法要の際、本山境内各所に置かれる提灯に、今もこの紋様を確認できます。

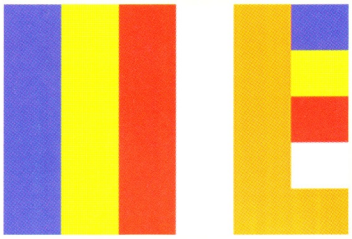
やがて、明如（みょうにょ）上人の時代になって、この山路雁木と菊花を組み合わせた「八角菊崩し文（はっかくきくくず）」の旗（紋旗とも）ができました。第一次世界大戦の際には、帝国陸軍省の旗と模様が似ていることから、太線と細線を逆にしたのだそうです。当初の本山旗は、紅地に八角の一種類でしたが、後に白地に八角の模様が加わり現在に至ります。

龍谷大学はじめ宗門関係校の校章などにも、この山路雁木のデザインが使われているところがあります。みなさんも色々なところでこの紋様に出会っていたかもしれませんね。

仏旗とは

現在の仏旗は、1950（昭和25）年の第1回世界仏教徒会議（世界仏教徒連盟［WFB］主催）で、「国際仏旗」として定められた世界共通の旗です。日本では、1954（昭和29）年の第2回全日本仏教徒会議において、正式に採択されました。5色の順番と面積（横を6等分し、左から第6分目は縦を5等分にする）は、下図のようになっています。

青・黄・赤・白・樺（かば）の5色は、それぞれ青＝定根（じょうこん）（仏の髪の毛）・黄＝金剛（仏の身体）・赤＝精進（仏の血液）・白＝清浄（仏の歯）・樺＝忍辱（にんにく）（仏の袈裟）をあらわしています。また、この5色については、『小部経典』というお経に、「仏陀が力をはたらかせる時は、青・黄・赤・白・樺と光明の6色の光が放たれる」とも説かれています。仏旗は、仏の姿そのものをあらわしているのですね。



（参考：財団法人全日本仏教会HP：
http://www.jbf.ne.jp/b10/index.html）

仏教儀礼

本願寺仏教音楽・儀礼研究所 ニュースレター 第14号

発行日：2012（平成24）年1月
編　集：本願寺仏教音楽・儀礼研究所
発行者：浄土真宗本願寺派 教学伝道研究センター　所長・佐々木惠精
〒600-8349 京都市下京区堺町92番地　本願寺第3庁舎内
Tel.：075-371-9244　Fax.：075-371-5761
http://crs.hongwanji.or.jp/ongi/
頒　価：無料
協力・写真提供：あおば幼稚園、本願寺史料研究所（掲載順）